
PBeM『VOiCE』第2回リアクション
02-X 消えてしまった願いも 僕は忘れないから

——魚を食べると頭が良くなるのよ。

平谷杏樹は、いつだったか母がそう言っていたのを思い出した。だから、母にねだった。入院している先生のために、魚の煮付けを作って、と。

青魚の切り身を四切れ、水と醤油^{しょうゆ}を大さじ四杯。

酒を大さじ二杯、砂糖は大さじ三杯。

適当に切った生姜^{しょうが}をひとかけ分。

歌うようにレシピを教えてくれる母と一緒に、キッチンに立った杏樹は、おっかなびっくりといった手つきで、言われた通りの分量に調味料を取り分けていく。

「キルシ先生、喜んでくれるかなあ？」

杏樹の言葉に、母は黙って髪を撫^なでてくれた。

魚といっても、本物ではない。人工に作られ、最初から切り身になっている。それが、ふたつの丘では一般的に「魚」と呼ばれるものだ。

——本で見た魚は、こんな形してなかったなあ。

変なの、と杏樹は思った。

できあがった魚の煮付けは、タッパーに詰めて、傷まないように保冷剤と一緒に布でくるんだ。

「病院のご飯だけじゃ、つままないもんね」

杏樹は飛び跳ねるように、春の日差しの下、病院へと向かった。

* * *

「せっかく持ってきてくれたのにね……」

看護師——フェリシテ・サン＝ジュストは、ぽつりと言った。その手には杏樹が持ってきたタッパーがあるが、中身はすでになく、きれいに洗われている。

キルシ・サロコスキを始めとする、あのフロアの入院患者たちの食事は厳しく制限されている。彼女たちに差し入れすることは可能だが、実際にそれを口にすることはなかった。

フェリシテはため息をつく。キルシが食べていないと知っ

たら、あの子はきっと悲しむだろう。キルシと口裏を合わせることもできるが、それははたしていつまで可能だろうか。煌々^{こうこう}と灯る街灯を眺めながら、看護師はもう一度ため息をついた。